ひめゆり平和祈念資料館

資料館だより

第68号

2021.11.30

新しい展示を見学する修学旅行生

もくじ

館長からのメッセージ 1

資料館への支援 2

「ひめゆり平和祈念資料館 LIVE ～ひめゆりの詩～」/ 中城村、糸満市による支援 /「RBC 平和朗読会」開催

展示リニューアル　ここが新しくなりました 3

資料館トピックス 5

ニュース…1. コロナ禍の資料館の現状　2. オンライン平和学習　3.「第 4 回 " ひめゆり " を伝える映像コンテスト」作品募集中 / 資料館案内板設置 /2021 年度慰霊祭挙行 / 日本カリキュラム学会第 32 回大会オンラインシンポジウムに館長が登壇 / 糸満市平和ガイド育成事業に協力 / 糸満市教育委員会の初任者研修に協力 /「沖縄平和学習におけるひめゆり資料館の活用案」をオンライン開催 / 第 28 回日本平和博物館会議に出席 / 沖縄南部観光協会からのご寄付 / 特別展「ひめゆりとハワイ」開催中

証言員のご逝去について / コラム　相思樹 9

博物館実習生レポート 10

本棚（仲程昌徳） 12

仲宗根政善日記抄（63） 13

ご利用案内 15

新型コロナウイルス感染症予防対策を行っています

マスク着用・手指消毒・検温に

ご協力ください

ご寄付と励ましのメッセージ
本当にありがとうございました

ひめゆり平和祈念資料館
館長　普天間朝佳

コロナ禍による当館の窮状を知った 9000 人余りのみな様から、これまでに（10 月 15 日現在）７千万円を超えるご寄付が寄せられています。ご寄付を寄せてくださった方の人数の多さと、寄せられたご寄付の金額に驚くと同時に、みな様がひめゆり平和祈念資料館を「なくしてはならない大切な場所」であると思ってくださっていることを改めて実感し、感動いたしました。

また、ご寄付とともに温かいメッセージも多く届き、強く励まされました。その中の一つ、中学校３年の生徒さんからのメッセージ（抜粋）を以下に紹介させていただきます。

> はじめまして。ぼくは新潟の中学校３年生です。（略）３年前の小学校６年生の夏休みに家族と沖縄旅行をし、ひめゆり平和祈念資料館を訪れました。
> たくさんのことを感じ考えました。そして、夏休みの宿題の作文にも書きました。（略）作文に書いたように、３年前の僕に出来ることは、未来に戦争を起こさないために、心で感じ続けこの思いが世界中の方に認められたら良いと考えていました。ツイッターを見たら今僕にできることがあると考えました。僕のお小遣いは少なく色々なことに使ってしまっているので、微々たる金額ですが送らせていただきます。感染症がなくなったらもう一度伺いたいと思います。少しでもお力になれるとありがたいです。大変な時期ですが、がんばってください。

６月には、MONGOL800 のキヨサクさんが「ひめゆり平和祈念資料館支援 LIVE ～ひめゆりの詩～」を有料配信し、その収益をご寄付くださいました。７月には中城村や糸満市の地方自治体による親子チケット購入などを通したご支援をいただきました。みな様からのご寄付は、当館の年間予算（１億３千万円）の半分以上になり、運営への大きな助けになります。

当館では、この危機を乗り切るために、経費節減や公庫からの借入、特定資産の取り崩し、オンラインによる企画などに取り組んでいます。しかし、コロナ禍収束の目途は立たず、これからも厳しい運営状況が続くと予想されます。私たち職員は、ひめゆりの体験者たちが運営してきたひめゆり平和祈念資料館を存続させ、その活動を次の世代へ引き継いでいくために、みんなで力を合わせ、この難局を乗り切っていきたいと考えております。

どうぞ、今後とも、当館の活動へのご支援、ご協力を心よりお願い申し上げます。

※寄せられたメッセージの一部は、当館ホームページでも紹介しております。

資料館への支援

◆「ひめゆり平和祈念資料館支援 LIVE ～ひめゆりの詩～」

古謝美佐子さん、キヨサクさん、玉城千春さん

沖縄出身のアーティスト MONGOL800 のキヨサクさんが、支援配信ライブを企画し、趣旨に賛同した民謡歌手の古謝美佐子さん、Kiroro の玉城千春さんが出演しました。

6 月 18 日のひめゆりの塔前での収録は、出演者、スタッフの皆さまのお気持ちがあふれるとても温かい雰囲気のライブとなりました。

6 月 23 日から 30 日まで有料配信され、収益から必要経費を除いた 4,250,720 円が寄せられました。当館にとって大きな助けとなっています。なお､視聴チケットには当館の入館チケットが含まれますので､ぜひご利用ください。

◆中城村、糸満市による支援

7 月、中城村、糸満市が、当館への支援を行ってくださいました。中城村からの補助金 100 万円の交付に対し、当館から親子チケット 2,000 枚を進呈しています。糸満市は親子チケットを購入しました。両自治体とも村内、市内の小中学生に配布を行い、子どもたちの学びにつながる支援を考えてくださいました。

チケットの期限は中城村は 2022 年 3 月末までです。糸満市も 2022 年 3 月末まで延長となりました。親子での平和学習にご活用ください。

浜田京介中城村長（前列右端）表敬訪問

當銘真栄糸満市長（左から２番目）表敬訪問

◆「RBC 平和朗読会」開催

学徒の手記を朗読する仲田紀久子アナウンサー

6 月 19 日、多目的ホールにて琉球放送（RBC）主催「RBC 平和朗読会」が開催され、46 人が参加しました。RBC が毎年慰霊の日前後に開催するイベントです。館の窮状を知ったアナウンス室の皆さんが、「ひめゆり資料館を多くの方に知ってもらいたい」と当館での開催を企画してくださいました。

RBC アナウンサーの狩俣倫太郎さん、仲田紀久子さん、仲村美涼さん、沖野綾亜さんが『絵本ひめゆり』、学徒の手記、引率教師やご遺族の心情を切々と読み上げ、会場には涙を浮かべる人の姿もありました。初めて訪れたという人も多く、ひめゆりについて知っていただく大事な機会となりました。

※入場者数を制限し、感染症対策を行った上で開催いたしました。

展示リニューアル

今回のリニューアルでは、展示の構成は大きく変えていませんが、展示にイラストを使用したり、動画を増やしたり、テキストの見直しと書き換えを行ったりするなど、伝わる展示を目指して表現方法を工夫しました。
前号ではリニューアルの概要についてお伝えしましたが、今号では以前の展示と大きく異なる部分を中心にご紹介します。

導入展示

新しくロビーに大型写真を設置しました。
等身大に近い大きさにしたことで、生徒の表情がはっきり見えるようになり、より親しみやすい雰囲気を作り出しています。
写真のそばには「『ひめゆり』というのは、わたしたちの学校の愛称です。」からはじまる短い説明をつけました。学校に通っていた生徒の話であること、沖縄戦の話であること、資料館がどのような場所であるかということを伝える内容になっています。

1944 年 3 月の修了式の日に野田校長先生を囲む写真
このちょうど 1 年後に沖縄戦がはじまった

第 1 展示室　ひめゆりの学校

相思樹並木をくぐる登校風景が入館者を迎える

第 1 展示室は「ひめゆりの青春」から「ひめゆりの学校」に名前が変わりました。学校生活を具体的に紹介することで、今の生徒たちとの共通点がわかりやすくなりました。戦争を体験した人たちがどのような人たちだったかを知ることは、第 2 展示室以降の戦争についての展示を身近に引き寄せて見ることにつながるのではと、期待しています。
「女師・一高女 最後の 1 年」では、沖縄戦に至る 1 年の学校の出来事を新しく追加しました。動員の大型イラストは、いよいよ戦場に向かう生徒たちの状況を表しています。

戦場への動員を描いたイラスト

第 2 展示室　ひめゆりの戦場

展示室の要所にイラストや動画を設置した

第 2 展示室は、戦場でのひめゆり生徒の活動を伝えます。
説明文だけでは伝わりづらかった生徒の仕事や戦場での様子を、イラストや動画などでより具体的に表現しました。
「ひめゆり学徒の収容」も新たに追加し、なぜ生徒たちが捕虜になるのを恐れたのか、どのように生き残ったのかを解説します。また、展示室の区分の見直しを行い「解散命令と死の彷徨」までが第 2 展示室となりました。

ひめゆり学徒の
収容状況のイラスト

ここが新しくなりました

第 3 展示室　ひめゆりの証言映像

第 3 展示室では、ひめゆり学徒の証言映像を上映しています。証言映像は生徒時代の写真の取り入れ方を工夫し、英字幕を追加するなど部分的な編集を行いました。証言の部分は以前と変わりません。

ひめゆり学徒の証言を聞くことができるこの展示室は、当館にとって大切な部屋のひとつです。映像を見た入館者から「体験者の話を直接聞いた」という感想が寄せられることもあります。じっくりと証言と向き合うことができる大切な場であるため、大幅な変更は行いませんでした。

体験者の証言を聞ける場所

第 4 展示室　鎮魂

体験者が最も大切にしてきた、資料館の核とも言える部屋です。証言やひめゆり学徒ひとりひとりと向き合うことができる空間として、第 3 展示室同様、大幅な変更は行っていません。

第 4 展示室には、亡くなった学徒と教師 227 人の遺影や体験者の手記をまとめた「大型証言本」がならび、伊原第三外科壕の実物大模型が展示されています。
新たに、伊原第三外科壕のガマの内部やガマとひめゆりの塔の位置関係がわかる動画、ひめゆり同窓生に歌い継がれ、鎮魂歌として流れている「別れの曲」の説明パネルを設置しました。

ひめゆり学徒や証言と向き合う空間

第 5 展示室　ひめゆりの戦後

「ひめゆりの戦後」を新設しました。米軍に収容され複雑な思いを抱えた終戦直後や体験を語ることができなかった長い期間、ひめゆり資料館を設立し戦争体験を伝える活動を続けてきたことなどを紹介します。

生き残ったひめゆり学徒にとって、沖縄戦は 3 か月で終わったわけではありません。その後の人生にも大きな影響を及ぼしました。その彼女たちの戦後を知ることは、沖縄戦が過去のものではなく現在まで続いていることを知ることにつながります。

ひめゆりの戦後

資料館トピックス

◆ニュース

1．コロナ禍の資料館の現状　2021 年度上半期（4 ～ 9 月）

2021 年度も入館者数は大幅に減少したままです。2021 年度 4 ～ 9 月の入館者数は 27,877 人でした。コロナ禍以前の 2019 年度同時期の入館者数（202,910 人）の約 14％です。学校団体は、2021 年度 4 ～ 9 月は 22 校で、2019 年度同時期（799 校）の約 2.8％に過ぎません。当館の運営の基盤は入館料で、年間の運営費は約 1 億 3 千万円です。全国の皆さまからご寄付が寄せられていますが、入館者の少ない状況がさらに長期化すれば、館の存続が危ぶまれる事態にもなりかねません。

10 月 1 日の緊急事態宣言解除を受け、秋以降の修学旅行が動き始めました。しかし、10 月は 2019 年度の約 10％、11 月以降も約 40％にとどまっています。引きつづき、皆さまのご支援をどうぞよろしくお願いいたします。

ひめゆりの塔周辺も閑散とした状況だった

2．オンライン平和学習

2020 年度よりコロナ禍で修学旅行が延期やキャンセルになった学校などの要望に応じ、オンライン学習の対応を行っています。2020 年度 14 件、今年 4 ～ 9 月に 13 件実施しました。オンライン学習には、現地を訪れることが難しい状況下でも学ぶことができるというメリットがあります。さらに修学旅行の事前学習などでもご利用できます。9 月からは従来のオンライン平和講話のほか、2 つの新しいメニューを加えました。詳しくは資料館（098-997-2100）までお問い合わせください。

◆オンライン平和学習メニュー

①ひめゆりの沖縄戦（平和講話）	多目的ホールで行っている平和講話をオンラインで実施します。ひとりの方の体験を追います。1 回 15,000 円（税込）　**＊証言映像あり**
②絵で見るひめゆりの証言	体験者と制作した沖縄戦の絵を使ってひめゆり学徒の沖縄戦体験を紹介します。1 回 15,000 円（税込）　**＊事前学習におすすめ**
③オンライン展示ガイドツアー	リニューアルした展示室をオンラインでガイドします。小中学生 310 円／高校生 400 円／大人 600 円（税込）　**＊オンライン修学旅行**

3．「第４回“ひめゆり”を伝える映像コンテスト」作品募集中

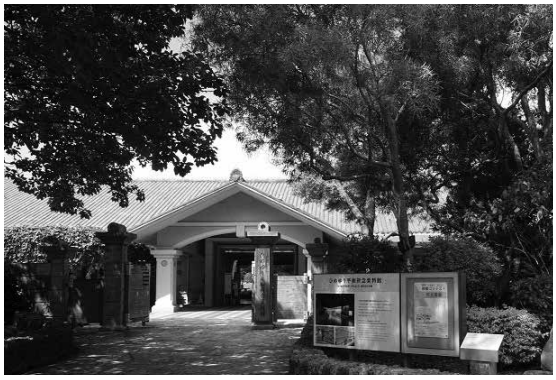
ひめゆり平和研究所主催「“ ひめゆり ” を伝える映像コンテスト」を作品募集中です。今回で第 4 回目となる本コンテストでは、10 分以内の映像を募集しています。演劇、アニメーション、創作ダンスやラップなど、自由な表現、さまざまなアイデアを募集します。テーマは前回に引き続き「ひめゆりと○○（自由選択）」です。創作したい内容に合うテーマを添えてご応募ください。これまでに「ひめゆりと修学旅行」や「ひめゆりと現代の子どもたち」というテーマでの応募がありました。締め切りは 2022 年 1 月 10 日必着です。たくさんのご応募お待ちしております。詳しくはホームページをご確認ください。

HP: https://www.himeyuri.or.jp/JP/top.html

◆資料館案内板設置

6 月 16 日、ひめゆりの塔の側に資料館を紹介する案内板を設置しました。

以前から受付には、ここはどういう施設か、どのような展示があるのかといった質問が寄せられていました。そこで、展示室の様子がわかる案内板を制作し、資料館の手前に設置しました。掲示スペースでは、イベントや展示会などの紹介を行う予定です。



案内板の設置場所

新しく設置された案内板

◆ 2021 年度慰霊祭挙行

6 月 23 日、「2021 年度ひめゆりの塔慰霊祭」が挙行されました。

感染対策のため、昨年同様、当財団理事や証言員（元ひめゆり学徒）など参列者を約 20 人に絞った小規模な慰霊祭となりました。

資料館の現状を知ったご遺族や来館者がご寄付をお寄せくださったり、リニューアルした展示を見に来たよという方が多くいらっしゃいました。

昨年同様小規模での開催となった慰霊祭

◆日本カリキュラム学会第 32 回大会オンラインシンポジウムに館長が登壇

6 月 26 日、オンラインで開催された日本カリキュラム学会第 32 回大会のシンポジウム「新しい時代を切り拓く平和教育のあり方について」に普天間朝佳館長が登壇し、「戦争からさらに遠くなった世代へ―ひめゆり資料館の平和学習プログラムとリニューアル」をテーマに発表しました。

その他の登壇者からは、「沖縄の平和教育実践の中で大事にしていること―学校現場ととりくんできた沖縄戦学習の実践から」（琉球大学山口剛史氏）、「『真正な対話』にもとづく平和教育の可能性―日米の子どもによる『より良いヒロシマ教科書づくり』プロジェクトを事例に」（広島大学金鍾成氏）、「カタストロフィの想起文化と教育〈メモリー・ペダゴジー〉モデルから平和教育を考える」（東京大学山名淳氏）などの発表が行われました

チャットで参加者との質疑応答も行われ、新しい平和教育の在り方について活発な議論が交わされました。

◆糸満市平和ガイド育成事業に協力

7 月 31 日、糸満市平和ガイド育成事業に協力しました。参加者は、糸満市内の中学生 8 人の新規受講生と、補助者（修了生）15 人の計 23 人でした。

証言員（元ひめゆり学徒）の沖縄戦を伝える活動を紹介した映像「ひめゆりの証言員たち」視聴と学芸員の解説、展示見学や感想交流を行いました。最後に補助者の代表によるひめゆりの塔ガイド実践が行われ、堂々と話す姿に今後の活動が期待されました。新しい展示には「動画が増えて字が苦手でもわかる」「笑顔の写真、髪型、イラスト、数学のノートなど、自分たちと近い人たちが動員され命を落としたことがわかった」といった感想が聞かれました。

◆糸満市教育委員会の初任者研修に協力

8 月 3 日、糸満市教育委員会の初任者研修に協力しました。参加者は糸満市の教員初任者 9 人でした。感染症対策のため、時間を短縮、研修内容も変更し、ワークショップの一部と展示見学、映像視聴、質疑応答のみとなりました。質疑応答では「なぜほかの学徒隊より、ひめゆりが有名なのか」「子どもたちに一番見てほしい資料は」といった質問がありました。

終了後、参加者からは「授業で使えるヒントを得ることができた」「今まで以上に使命感を持って平和教育を考えながら進めていきたい」と感想が寄せられました。

◆「沖縄平和学習におけるひめゆり資料館の活用案」をオンライン開催

10 月 3 日、オンライン企画「沖縄平和学習におけるひめゆり資料館の活用案」が開催され、約 80 名が参加しました。コロナ禍で修学旅行のキャンセルが相次ぐ中、学校関係者や旅行会社の方々に沖縄平和学習に関心を持ち続けてほしいと、平和ガイド団体等による共同プロジェクト「沖縄ピースリンクプロジェクト」が企画しました。

前半は、古賀徳子学芸員が映像や写真を使ってリニューアルした展示を紹介し、後半は、沖縄県観光ボランティア友の会、沖縄平和ネットワーク、南風原平和ガイドの会・南風原文化センターが、戦跡を歩いてめぐるコースや体験型の学習、亡くなった学徒個人に焦点を当てた学習など、多彩な平和学習プランを提案しました。参加者からは、修学旅行の下見に行けず不安だったが、展示の様子や活用の仕方を知ることができてよかった、事前事後学習に生かしたい、などの感想が寄せられました。ぜひ、また修学旅行に来ていただきたいと思います。

◆第 28 回日本平和博物館会議に出席

11 月 1 日、第 28 回日本平和博物館会議がオンラインで開催され、普天間朝佳館長と宮城奈々説明員が出席しました。協議事項は「①コロナ禍での学校に対するサポートについて」「②オンライン平和学習について」「③コロナ後の平和博物館の財政的困難に対する打開策について」の 3 つです。

①については、教材や映像の貸し出し、証言映像の YouTube 配信やオンラインによる平和学習プログラムの取り組みなどの報告がありました。②については、広島平和記念資料館より、オンライン講話をす

る被爆者や伝承者が機器の扱いに慣れてないという課題が挙がりました。オンラインでの取り組みを行っている館は少なく、行いたくても人員が足りないという意見もありました。③については具体的な打開策は出ませんでしたが、今後も各館で情報共有し、継続して話し合うことが確認されました。

◆沖縄南部観光協力会からのご寄付

2021 年 10 月 26 日、沖縄南部観光協力会会長宮里耕平氏、事務局長伊佐竜太氏が当館を訪れ、寄付金の贈呈がありました。沖縄南部観光協力会は、沖縄県南部地域の企業など 21 機関で構成されています。南部の観光の魅力を伝え活性化を図ることを目的とした会で、当館も会員です。

宮里耕平会長（中央）からのご寄付の贈呈

宮里会長は館の現状を知り、ひめゆり資料館は南部の平和学習の拠点として重要であり、沖縄の歴史や文化を伝えるために必要な場所だとして支援を決定したそうです。挨拶では「コロナ禍で誘客やセールス活動が難しい状況でどう支援するか考えたとき、館への貢献度が高い寄付というかたちをとることにしました」と、寄付に至る経緯が話されました。普天間朝佳館長は「地元の南部観光協力会からの支援は本当にありがたい。同様に会員である周辺のお土産品店も休業状態が続いています。一緒に難局を乗り越えていければ」と話しました。

◆特別展「ひめゆりとハワイ」開催中

ひめゆりとハワイのつながりを紹介する特別展「ひめゆりとハワイ」が 10 月 1 日にはじまりました。本展示会は、ひめゆり平和研究所が 2019 年から取り組んでいる「沖縄戦・ひめゆり学徒隊の歴史を海外に伝える展示プロジェクト」の集大成となります。

ハワイの海をイメージした２章
「ハワイのひめゆり」パネル

ひめゆり学徒隊引率教師の親泊千代子先生は、ハワイ生まれでした。戦後、ハワイに移住したひめゆり同窓生もいます。また、1950 年ごろ、ひめゆりの塔周辺の荒れた状況に心を痛め、敷地購入資金を寄付したのは沖縄系ハワイ２世のハリー・儀間真一さんでした。これらのつながりからひめゆりや沖縄戦の歴史を見つめ直します。１章「ひめゆりと沖縄戦」、２章「ハワイのひめゆり」の２部構成となり、特に後半ではハワイとひめゆりをつなぐ関係者のストーリーを紹介します。

期間は 2022 年 2 月 27 日までです。期間はコロナ禍で足を運べない方にも見ていただきたいとウェブ上でも展示内容を公開しています。資料館にて図録も販売中です。通信販売も行っています。

Web サイト : https://himeyuri-and-hawaii.com

証言員のご逝去について

寂しいお知らせになりますが、昨年 12 月に津波古ヒサさん（93 歳）が、今年 8 月に宮良ルリさん（94 歳）が亡くなられました。逝去を知った皆さまから「資料館で会いました」「修学旅行でお話を聞きました」という声が多く寄せられ、彼女たちの活動の影響の大きさを改めて実感しています。

訃報を耳にすると、一緒に過ごした時間が思い出され悲しくなります。私たち職員は、ひめゆり資料館を拠点に多くの人に戦争の実相を伝え、平和を訴えてきた彼女たちの姿勢や思いを忘れず、館の存続に力を尽くします。

＊開館以来、当館では 30 人の元ひめゆり学徒が「証言員」として活動しました。
2021 年 9 月までに 16 人の方がお亡くなりになりました。
照屋菊子、世嘉良利子、宮城信子、平良緋手代、比嘉文子、喜納和子、大城信子、城間和子、仲本幸子、宮城喜久子、前野喜代、福治秀子、上原当美子、津波古ヒサ、宮良ルリ、比嘉秀

相思樹

コロナ禍での気づき

学芸員　前泊克美

「絶対になくしてはいけない施設」「後世まで残って欲しい、触れるチャンスを失ってはならない」「いつか必ず訪れたい」。コロナ禍での館の窮状を知った皆さまから寄せられた声の一部です。

新型コロナウイルス感染症は資料館の日常を変容させました。73日間の休館、説明員（職員）による展示室内での説明の休止。昨年2月以降、証言員（元ひめゆり学徒）が館に来ることもままならなくなりました。ひめゆりの塔や館内が修学旅行で賑わう光景もほとんど見られません。入館者数の激減は運営の危機に直結しました。

このような状況が報道やＳＮＳなどで広がるとともに支援も広がりました。

かつて修学旅行や観光などで訪れた方々は「なくしてはいけない」として、まだ行ったことがないという方々は「いつか訪れたい」として寄付をお寄せくださいました。これらの支援はコロナ禍という闇に差し込んだ光明のようでした。

ご支援くださった方のなかには、資料館で体験者の話を聞いたという方が多くみられます。30年に渡って沖縄戦を伝えてきた証言員の活動の蓄積が「ひめゆり資料館は沖縄戦を伝える大切な場所」という認識を作り上げてきたのだと思っています。

支援とともに届いたメッセージは、ひめゆり資料館が多くの人に支えられているということに改めて気づかせてくれました。まだ安心できる状況ではありませんが、資料館を次の世代につなげるために一歩ずつ進みたいと思います。

2021 年度博物館実習生レポート紹介

7 月 30 日から 8 月 9 日までの日程で、琉球大学人文社会学部琉球アジア文化学科から博物館実習生 2 人を受け入れました。紙面の都合により一部ですが、実習生の課題レポートをご紹介します。

ひめゆり平和祈念資料館と沖縄戦の次世代への継承

琉球大学人文社会学部琉球アジア文化学科　4 年次　伊差川鈴子

沖縄戦の継承と資料館の役割

沖縄戦の継承には、戦争に関わる出来事や記憶を現在と断絶した「遠い過去の歴史」にしないことが大切だと思う。沖縄戦に関する知識を学び、自分なりに理解することと、戦争体験者の体験や記憶、思いなど形あるモノとして残らないことも次世代へと受け継いでいくことが必要である。（略）また、沖縄戦は地域ごとにその特徴が異なり、一人一人の体験にも違いがある。体験者自身が証言することが難しい現状において、地域を中心として沖縄戦について調査・記録・保存し伝えることが求められる。

（略）戦跡や慰霊碑自体は人々の体験や記憶を伝えることはできない。その場所の意味、記憶を伝えていくことができるのは人であり、資料館ではこうした戦跡、慰霊碑なども含めて、一般の参加者が学ぶと同時に伝えることができるような取り組みを行い、人による歴史・記憶の継承を大事にしている。（略）人々が受け身になることなく沖縄戦について考え続け、一人一人違う、戦争や平和、継承のあり方や意味を問い続けることができる場であることが重要だと感じた。

課題

沖縄戦やひめゆり学徒隊を学び継承していくことに関して資料館が果たす役割は大きいと思われるが、入館者の減少や若い世代の認知・関心を上げることが課題であると考える。（中略）年齢や関心に合わせて段階的に繰り返し資料館で学習できるような仕組み、県民が資料館を気軽に訪れることができるきっかけづくりが必要だと考えた。

取り組み

資料館で繰り返し学習してもらうための方法として、小・中・高・大学（大人）のように年齢別で内容を分けた勉強会などのイベントを定期的に行うことがよいと考えた。特に高校生や大学生、専門学校生などの来館が少ないと思うので、学生向けのワークショップなどをもっと考える必要がある。学校と協力して学生の募集を行い、授業の一環として資料館のイベントに参加できるようにすることが、関心のある学生が実際に館に足を運ぶきっかけになるのではないかと思う。また、感じたことや考えたことなどを共有したり意見交換したりできる場があると良いと思った。同じ展示を見てもどこに着目するか、どう感じるかは人それぞれである。沖縄戦に関するそれぞれの理解度を深めていく一方、年代の違う人と話し合ってお互いに学び合うことのできる機会を作り、多様な考え方に触れることが大切だと感じる。

今回実習を通し沖縄戦に関する継承の難しさを感じた。継承の方法に正解などなく、たくさんの議論を繰り返しながら、伝えたいことが伝わるように、そして次へつなげられるように資料館のあり方を考え続けることが大切だと学んだ。（略）私自身は、沖縄戦に関して分からない、理解できていないこともたくさんある。しかし、戦争が遠くなりつつある現在、教えられるだけではなく伝える側として何ができるのかを考え行動していきたい。

実習生の田村さん（中央）と伊佐川さん（右隣）

「ひめゆり平和祈念資料館と記憶の継承―糸満市内の慰霊碑（塔）の活用―」

琉球大学人文社会学部琉球アジア文化学科　4 年次　田村柚衣

初めに

実習の中で私が感じた「課題」と「戦争からさらに遠くなった世代」の私が考える「記憶の継承」についてを本レポートに記したい。

「継承」と「伝承」について

平和学習や平和博物館、戦争体験を語り継いでいくときなどに「継承」と「伝承」という言葉 が使用される。この両者の言葉の違いについて、京都教育大学にて平和教育を研究している村上登司文は以下のように述べている。

> 「継承」とは、戦争体験の記憶を受け継ぐ一般的な言葉である。他方「伝承」は、ある集団の中で古くからある戦争体験の記憶を受け継いで後世に伝えていくことであり、受け取るだけでなく次に伝えることまで含む言葉である。つまり、「伝承」は聞いた内容を第 3 者に伝える活動を含む。一般的には、戦争体験者から聞くことと、それを伝えることの両方ともに「継承」が使われることが多い。ただし、近年は、戦争未体験者による継承を示す言葉として「伝承」が意図的に用いられることが多くなっている。（JSPS 科研費基盤研究 (C) 研究成果報告書 (平成 29 年度～ 31 年度）村上登司文 2018 年)

つまり、この言葉の変化が指し示すのは、従来のような歴史の受け継ぎ方は難しくなり、それに伴い当事者意識が薄まる原因にもなるということではないだろうか。

「沖縄戦」や「ひめゆり学徒隊」、「集団自決」などを「自分ごと」として自身の中に落とし込んでいくためにはどのような方法があるのか、この実習を通して私は糸満市内に存在する慰霊碑（塔）と SNS を連携させたアウトプット型の平和学習方法を勧めたいと考えた。

慰霊碑（塔）

この平和学習の題材として「慰霊碑（塔）」を選んだ理由は大きく 2 つある。まず 1 つは、糸満市内には 124 もの慰霊碑（塔）が存在し、沖縄に存在する全慰霊碑（塔）の 約 4 割を占めている事実があるにも関わらず、その事実があまり知られていないことだ。（略）

もう 1 つの理由は、ひめゆり平和研究所の事業「メモリーウォーク」の存在である。糸満市内の 6 つのモニュメントを巡って学習をし、最後に一つのモニュメントを題材として選び作品を作るというこの事業は、「聞く」側から一歩飛び出し自分が「伝える」側になるという映像制作による新しい平和教育として、とても良いアウトプットの方法だと考えた。（略）糸満市の多くの慰霊碑（塔）の存在を知って学び、発信していくことで戦争の実体験や戦争体験者の話を聞いた経験がなくても「当事者」として意識を持ち戦争について考えるきっかけになると思った。

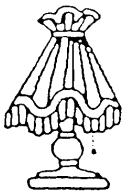
SNS を用いた学習と情報の発信

以上のことから、糸満市内にある慰霊碑（塔）を用いたアウトプット型の平和教育として、SNS と連携して行うことでより効率的に進めることができるのではないか。

方法としてはメモリーウォークのようにグループを作り、各グループでインスタグラムの一般公開アカウントを作成し、そこで実際に学んだことや感じたことを日記形式で投稿する。

SNS を使用するので対象として想定しているのは高校生～一般人だが、そのアカウントが一般公開ということで責任を持って発信するための調べ学習を行ったり多くの人からの意見を頂く機会が増えると考えた。（略）

平和学習以外の提案としてひめゆり平和祈念資料館の公式 SNS で館の情報だけではなく、糸満市内のひめゆりに関連する場所の情報発信をしてはどうか。そうすることで観光客や沖縄県民の沖縄戦理解について深めることのできる場所を提供できるのではないか。



本　棚

仲程　昌徳

藤原健『終わりなき＜いくさ＞～沖縄戦を心に刻む』（琉球新報社 ,2020 年）

2016 年から 2020 年まで『琉球新報』に連載した「おきなわ巡考記」をテーマごとに選択・配列し、補足するとともに、沖縄戦に関する著作の書評等を「Ⅰこれまで―記憶の断面」「Ⅱいま―鮮明にする立ち位置」「Ⅲこれから―抗い、つながり、歩く」の三項にまとめ、プロローグとエピローグを付し構成した一冊である。

項立ての題名からわかるように、「巡考記」を核にした本書は、沖縄の「これまで」「いま」「これから」を論じたものであるが、各項の立ち位置には差異が見られた。具体的にいえば、「これまで」は、聞き取りという聞き手の立場から、「いま」は、『沖縄戦新聞』の研究の成果を踏まえた研究者の立場から、「これから」は、戦跡に立ち、現場から伝えるといったかたちをとっている。

本書の特質ともなっている例を二、三あげると、「これまで」の章では、体験談を語ることのなかった人が語り出すまで待っていた人に焦点をあてていたといったことがある。著者は、体験談の語り手にだけでなく、その聞き手に目をむけているのである。それは、また、ひめゆり学徒隊として看護活動にあたった生徒にではなく、郷土部隊の一員として戦場に出たひめゆり学徒の体験に目をむけたといった点などにもよく表れている。つづめて言えば、これまでよく知られてなかったことを、聞き出していったということである。そのことが示唆しているのは、沖縄戦に関する出来事の掘り出しが、まだまだ必要だということである。

著者は、長い間『毎日新聞』の記者をしていた。定年後「関連会社の役員」になるが、まもなく退任し、沖縄に移住。大学院に籍をおき、『沖縄戦新聞』をテーマに、研究に打ち込んでいく。その成果が『魂の新聞『沖縄戦新聞』沖縄戦の記憶と継承ジャーナリズム』である。

『沖縄戦新聞』は、1944 年から 45 年当時、作ることのできなかった紙面を、2004 年から 2005 年現在の今日の視点で作り上げ、沖縄戦の経過およびその結果を明らかにしていったものであった。『魂の新聞』は、それを対象にすえ、戦後の状況、『沖縄戦新聞』の登場、その後の新聞、といった流れを追い、沖縄戦が戦後どう語られてきたのかを検証し、やがて戦争体験を語るものがいなくなる時代を前にして、それを継承していくのにどのような試みがなされてきたか、さらにそれを後世につないでいくためにはどうしたらいいのか、といった難問に向き合い、継承のための具体的な指針をしめしていく。

「いま」は、そのように大学院で研究課題として取り組んだ『沖縄戦新聞』の分析を通して、鮮明になった新聞の役割について述べることに主点をおいているが、新聞とともに日々、戦争を見つめなおすための実践的な活動をしている施設、例えば伊江島の反戦平和資料館「ヌチドゥタカラの家」、佐喜眞美術館等の活動についても筆をのばしていく。

「これから」は、戦跡巡行記といっていいものである。「巡行」は、戦跡としてよく知られているところだけではなく、訪れる人がほとんどいない「牧港補給地区沿いの森」などにも及んでいる。なぜ、戦跡か。それは「歩きながら」でないと学べないものがあるからであり、現場に立たなければ見えてこないものがあるからだという。

著者は「月に 3 回は戦跡を巡った」という。著者がめぐったのは「戦跡」だけではない。それは先にふれた戦争関係施設をはじめ、高江であり、「不屈館」等である。そのように、戦跡を回り、戦争関係資料館をまわり、米軍への抵抗を旗印にした施設、および闘争現場に足を運び、沖縄戦に関する諸資料を渉猟して書いた記事をまとめ上げたのが本書であった。著者の熱誠は、読者を奮い立たせるものがある。著者の熱誠ということに関していえば、あと一つ付け加えておきたいことがあった。

それは、「ひめゆり平和祈念資料館と『琉球新報』『沖縄タイムス』の沖縄地元 2 紙が協力して沖縄戦の記憶の継承マインドを強化するための研修」を実現させたことである。研修会には若手記者計 26 名が参加し、意見交換が行われたという。それは、ひとえに著者の熱意があって実現したことであったといっていいだろう。

著者の「沖縄戦」の現場に立つという信念は、プロローグとエピローグを読むだけで伝わって来る。そして、その熱い思いが形をなしたのが、「記憶の継承」を強化するための研修会であったのである。

仲宗根政善日記抄（63）

［1980 年］六月一日

午後一時からグランドキャッスル首里の間で、ひめゆり同窓会が、開催された。四百名を残す同窓会が、場内にあふれるばかりに集まった。昨年は、戦争当時の在校生に修了証書を授与するということもあったので、あれほど大勢の同窓生が集まったと思った。しかし、今度の同窓会はそういう特別のこともなかったのに、昨年以上に集まっている。母校を失い、母校へのなつかしさが、年とともにつのりつつあるのであろうか。教師と生徒、生徒と生徒があれほどに信頼し合い、むつみかわしていたのは、ただ美しい校風とだけも言えないのではなかろうか。この深い人間関係は沖縄の地域共同体に深く根ざし、それが学園で一層醇化されたものにちがいない。戦争によって、母校は跡形もなく焼きはらわれて、再建の熱願を持ちながら達成されない。消え失せた母校の追憶の情がつのりにつのりつつあるのである。

場内のあのなごやかな雰囲気にひたると、大きな家庭のようにも感じられる。

戦争で生き残った生徒たちが、一角に集まっていた。「ひめゆりの塔をめぐる人々の手記」のちらしを、手にしながら、いつどこの本屋に来るのですかと、しきりに尋ねていた。舞台では美しい踊りのおどられている最中である。急に涙がにじんで来た。最後の解散の時の壕の中がうかぶ。喜屋武断崖に追いつめられて、死をみつめていたときのことがうかぶ。三三五五砲弾弾雨の中へ三三五五つれだって死の彷徨へとちって行く後姿がうかぶ。彼らの多くは永久に、消え行ったのである。円卓をかこんでいる生きのこりのほかに二百余名の死んで行った生徒たちがいる。この広い場内をうめつくす生徒たちが、この戦争で死んで行ったのである。美しい踊りにみとれている同窓生の中にいて、死んで行ったこれら多くの生徒の顔をうかべて、私ばかりがしずみこんでいる。校長になって、皆から祝福されている赤嶺千寿子さんのはれやかな顔をみていながらも、涙がにじむ。

昨年の同窓会のとき、当時の在校生に、修了証書を授与した。上原当美〔子〕さんが、つかつか上って来て、その時のスナップ写真を渡してくれた。上原は、最下級生＊でありながら、壕から壕への連絡にもよく使われた。解散後、前線を突破して、糸満照屋にまで進出して行って捕虜になった気丈夫な生徒であった。

［1980 年］六月四日

小学校の頃、欧州大戦が終って、戦後も、野原で不発弾が発見されていると、上里堅蒲校長から聞かされてショックだった。戦争のなまなましさ、悲惨が胸につきささるようであった。

戦後の沖縄はどうであったであろうか。真和志小学校の鳥小屋校舎の軒先で、ぽかぽかとした春日に、突然、地下の不発弾が轟然と爆発して、児童多数が即死または重傷を負った。そのすぐそばに住んでいただけに、いまもそのときのショックは大きい。小禄幼稚園の近くでも五百キロ爆弾が、道路工事中発見されて、附近住民が避難したことがあった。そのときは園児には被害はなかった。

野に火がついて、埋もれた不発弾がつぎつぎと爆発して、まるで戦争中の観を呈したことがある。野で畑を耕している農夫が鍬の先で、不発弾をぶちあてて即死した例もある。都市のどまん中からも、不発弾が発見される。天文学的数量の爆弾を投下された沖縄の地下にはまたまたいくら不発弾が埋没しているかわからない。三十五年たった今日でも、毎日発見しつづけられているという。

糸満沖の青波の中に浮いている伊保島と称する白洲がある。戦後この洲に眼がつけられて、海中道路を造って、その砂利を運んで、建築用に使（ママ）いていた。ひめゆりの塔への往き通いにいつもこのさびしい白洲を眺めて来た。

ところが、いつのまにか、この白洲が、不発弾集積所になっていた。糸満土地開発公社ではここら一帯を埋め立てて、水産加工団地に使用しようと計画して、不発弾集積所はどこかへ移動させてもらいたいと要求している。ところが集積所の移動先が見つからないで。県は苦慮しているといわれる。

考えてみれば、何というおそろしいことだろうか。不発弾が今も毎日発見されつつありそれを集積する場所さえ見つからないことが、いかに沖縄戦が激しい戦闘であったかを端的に物語っている。戦争中、不発弾を飛びこえては肝をひやした。あの無気味な弾がいまも地下に無数にうずもれている。しかし、多くの人々の戦争体験は風化してしまって、あの不発弾から、沖縄戦のすさまじさ

を思い浮べ、それに倒れた二十余万の生命が失われたことをなまなましく思い浮べる者は、もうなくなっている。心の奥底に不発弾を抱いている者がなくなってしまったのである。沖縄の歴史の中に、永久に不発弾は生れてしまうであろう。しかし、ときどきその不発弾は爆発しないとも限らない。真実はうずもれることはないとも思ったりする。いつまでも、地下に不発弾がうずもれていることを、沖縄人を忘れずに〔いて〕ほしい。民族の歴史の奥底に不発弾は無気味にうもれたままである。

［1980 年］六月七日

角川歴彦氏が来島して、「ひめゆりの塔をめぐる人々の手記」が出来上ったと、持って来てくれた。紅型模様を入れた表紙は美しい。最後になくなった職員生徒の写真を入れることが出来た。年来の念願であった。遺族一人一人にお配りすることが出来て、少し気が楽になった。遺族にとっては、本一冊よりも氏名の四字五字が大切なのである。

安室幸子さんと美里キヨさん二人は、陸軍病院移動の夜、傷ついて足をひきずりひきずり、弾雨の中を歩いている私をかばいはげま〔し〕助けてくれた。肩からカバンをとって自らの肩にかけ、道畑の砂糖黍を折って来て、白歯でむいて渡してくれた。井戸から水を汲み、清水を飲ませてもくれた。しかし美里はどこで最期をとげたのかもわからない。その妹は、病身で生活にさいなまれているようである。わざわざ大阪までも訪ねて行って、慰めてあげてくれたようである。弾雨をいっしょにくぐりぬけた者同志に同感される親しみがある。

遺族へ「ひめゆりの塔をめぐる人々の手記」を一冊ずつ謹呈申し上げておいた。

〔玉那覇幸子（旧・安室幸子）の手紙〕

拝啓

長い間　御ぶさたいたして　おりますが　お元気でお過ごしでございましょうか、お伺い申し上げます。

沖縄はもうすっかり暑くなったことと思います。

こちらは初夏の一番過ごしやすい季節でございます。

先月十八日の同窓会　おかげ様で　多勢（ママ）の方がお見え下さいました。先生方も九名程御出席下さいましたが

藤野先生が久しぶりにお出でになりましたが御挨拶の声が　昔の授業中の声とちっとも変りなく当時のことが思い出されて涙が出そうになりました。

八〇才前後の大先輩方の歌あり踊りありで大盛況で時の経つのも忘れほんとに楽しい一日でございました。

それから美里徳子さんから二月頃御手紙をいただきました。□□有難うございました。

ところが　せっかくお手紙をいただきましたのに　病気で入院したとのことでしたので早速御見舞いに行って来ました。（中略）

慰霊祭も近づいて参りました　キヨさんに妹さんを充分見守って下さるようお祈りして下さいませね。

其の後　お電話をいただきましたが調子もよく着付け教室に通っているとのことで　夏休みに又大阪まで行ってみようかと思っておりますが　若いから快復するのも早いかと思います。

それから少しでございますが　新茶をお送り致しましたので　お使い下さいませ。

その中　又お目にかかりたいと思います。

お身体に気をつけてお元気でお暮らし下さいますようお祈りいたします。

奥様にもよろしくお伝え下さいますように。

かしこ

六月二日　玉那覇　幸子

先生へ

＊最下級生：上原当美子は沖縄戦当時師範予科３年生。17 歳。ひめゆり学徒隊に動員された生徒は上原より学年が下の予科１・２年生や一高女３・４年生もいた。

※読みやすさを考慮して、字句を補った箇所がある。

※〔 〕は編集で補った。□は判読不能。

※旧字体は新字体へ変更し、明らかな誤字は改めた。

ひめゆり平和祈念資料館　ご利用案内

◆ 開館時間、料金、アクセス

1．入館受付：午前9時～午後5時（閉館は午後5時 25 分）　**2．休館日**：年中無休

3．入 館 料：①大人 450 円　②高校生 250 円　③小・中学生 150 円

団体（20 名様以上一括払）①大人 400 円　②高校生 200 円　③小・中学生 110 円

※ 2021 年 4 月 12 日より、入館料が改定されました。

4．交通案内

【路線バス】旭橋・那覇バスターミナルから［89 糸満線］で約 30 分、糸満バスターミナルで［82 玉泉洞糸満線］に乗り換え約 15 分、ひめゆりの塔前下車

【モノレール・路線バス】モノレール那覇空港駅から赤嶺駅まで約4分、赤嶺駅前（糸満・豊崎向け）バス停で［89 糸満線］に乗車し約 20 分、糸満バスターミナルで［82 玉泉洞糸満線］に 乗り換え約 15 分、ひめゆりの塔前下車

【車】那覇空港より約 30 分

◆ 団体のご見学について

新型コロナウイルス感染症対策のため、当面の間、**見学は予約制となります。必ず事前にご予約ください。**

◆多目的ホールご利用のご案内

ひめゆり学徒隊や沖縄戦について学ぶための平和講話(約 40 分)、ビデオ視聴(証言ビデオ「平和への祈り―ひめゆり学徒の証言」約 25 分、アニメ「ひめゆり」30 分）を事前予約制で承っております。ご予約は、資料館ご見学の団体に限ります。ご予約時間は下記受付時間内で調整いたします。お電話にてホールの空き状況を確認後、ＦＡＸかメールにて申込書をお送り下さい。

【講話 or ビデオ受付時間】9:05 ～ 16:00（最終 16:00 開始）

※年末年始（12 月 30 日、31 日、1月1日～3日）･旧盆（旧暦7月 13 日～ 15 日）･慰霊の日前後（6月 21 日、22 日、24 日）は、講話の予約はできません。ビデオ視聴のみ受付可能です。

※慰霊の日（6 月 23 日）はビデオ上映会のため、講話・ビデオともに予約はできません。

※ホールの収容人員は約 200 人（席）です。

※多目的ホールは講話及びビデオ視聴以外の目的（セレモニー等）には利用できません。

※予約時間に遅れた場合、予約状況によってはキャンセルさせて頂くこともございます。

※現在、新型コロナウイルス感染症対策をとりながら開館しております。多目的ホールのご利用方法につきましても、感染症の拡大状況に応じて変更がある場合がございます。詳しくは、直接お電話にてお問い合わせください。

◆オンライン平和学習の案内

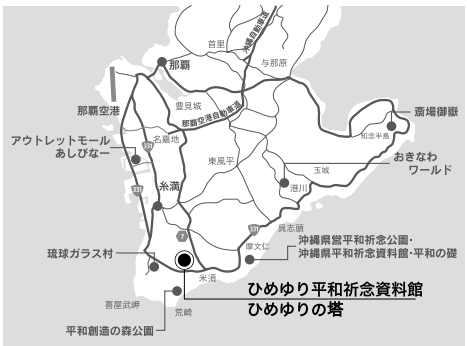
コロナ禍で沖縄へ足を運べない学校団体や修学旅行の事前学習として、オンライン平和学習の予約を承っております。
詳しくは資料館までお問い合わせください。

【オンライン平和学習メニュー】

所要時間：50 ～ 60 分　　人数：20 人以上

①ひめゆりの沖縄戦（平和講話）　料金：1回　15,000 円（税込）

②絵で見るひめゆりの証言　料金：1回　15,000 円（税込）

③オンライン展示ガイドツアー　料金：1人　小中学生 310 円　高校生 400 円　大人 600 円（税込）

ひめゆり平和祈念資料館 資料館だより 第 68 号
2021（令和 3）年 11 月 30 日発行
編集・発行：公益財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団立
ひめゆり平和祈念資料館
〒 901-0344　沖縄県糸満市字伊原 671-1
☎ 098-997-2100　fax098-997-2102
H　　P：http://www.himeyuri.or.jp/
Facebook：https://ja-jp.facebook.com/HIMEYUIRI.PEACE.MUSEUM/